

## 10 天神信仰の流れ

このように当初の天神信仰は、無実の罪を着せられて悲惨な最期をとげた道真に対する世人の同情心と、その当時の不可解な相次ぐ事故などに対する恐怖心とが結びつき、それを道真の怨霊による祟りと信じたところから、その御霊を鎮め祀ることに主眼がおかれている。そして平安後期にできた歴史物語の『大鏡』には、道真のことが「荒人神」として記述されており、また当時の仏教関係書などには「太政威徳天」とか「天満天神」「火雷天神」というような言い方もみられる。

けれども、時代がだんだん移るにしたがって、人びとに災いをなす怨霊神ではなくて、むしろ学問や国家を守護する神様として信仰されるようになる。たとえば、すでに平安時代の中ごろから、学問する人びとは、道真を「文道ノ祖、詩境ノ主」と称して仰いでいる。また、鎌倉時代の初めごろできた『北野天神縁起』も、その巻頭に「王城鎮守の神々おほくましますと、靈験まことにあらたかにて、あけのたまがきに

再拜せぬ人なかりけり。……あはれめでたき北野宮かな」としるしている。

これによれば、「北野天神」というのは、王城守護神のなかでもとくに優れた神さまだとされている。しかもつづけて「一人たなごころをあはせ、万民かうべをかたぶく」とあるから、北野天神は、一人つまり天皇も手を合わせて拜まれ、一般の人びとも頭を垂れて礼拝する神さまだというのである。

さらに縁起は、道真を「文道の大祖、風月の本主」と讃える一方、「本地を尋ねれば観音の垂跡なり。慈悲の弘誓浅からず」とか、「正直を存じ慈悲の心ふかくて人をたすけ」と、正直の神・慈悲の神としての功德をも強調している。文人官吏として誠実な生き方を貫いた道真が、正直な人びとを救う神として仰がれるようになったのは、むしろ当然かもしれない。

このように道真は、荒々しい怨霊としてよりも、むしろ学問を守り国家を守護し、人びとを救う神さまとして信仰されるようになったのである。それは中世から近世にかけて、さまざまな形で一般に広まった。

たとえば、室町時代の禅僧たちの間では、道真が夢の中で中国へ渡って禅宗を会得し、日本に帰ってそれを弘めた、という面白い信仰がみられる。これを「渡唐天神信仰」というが、江戸時代にも渡唐天神を描いた絵像がたくさん出まわっている。

また、江戸時代の天神信仰は、最初にのべたように、庶民たちの寺子屋で学問の神さま、手習いの神さまとして広く信仰されたことが、何よりも大きいと思われる。もちろん、公家や大名のなかにも、菅公を深く崇敬した人びとは少なくない。また神道家のみならず儒学者や国学者などの天神信仰も、前代にも増して盛んにみられる。たとえば、加賀百万石の大名前田家は、菅原氏の後裔と称して、とくに学問を好んだ藩主綱紀（母は水戸光圀の妹、妻は保科正之の娘）が、菅公・天神信仰に関する貴重な典籍・絵巻などの収集に努めている（現在も前田育徳会の尊経閣文庫に所蔵）。また、塙保己一という盲目の和学者は、道真の学徳を敬仰し、天神さまに千日参りをして学問の成就を祈り、道真の編纂した『類聚国史』を国書分類の手本にして、『群書類従』という膨大な国史国文関係の史料集を編纂し刊行している。さらに、国学者の平田篤胤などは、道真の作と仮託される『菅家遺誠』を増補して、いわゆる和魂漢才の説を吹聴している。調べてみると、道真自身は「和魂漢才」という言葉を使っていない。しかし、道真は日本的な心を根底にすえて中国伝来の学問を充分身に付けた「和魂漢才」の典型的な人物である。しかも明治時代には、この和魂漢才をもじって「和魂洋才」とか「士魂商才」という言葉が流行している。これも形を変えた天神信仰のあらわれといえるかもしれない。

以上、大まかに天神信仰の流れをみてきた。ここで私が道真を敬仰する所以をひとことでもいい、そのひたむきな誠実さである。和漢の学問に優れ立派な詩文を遺してゐることも、天皇の信任を得て破格の昇進をとげたことも、評価するにやぶさかではないが、むしろ私は、どのポストについても精一杯職務に励み、ときには危険を冒しても直言することを憚らず、罪なくして九州へ追いやられても抗弁することなく死についた、そのひたむきな生きざまに感動を覚える。

古来、多くの日本人が道真を尊敬し、今なお根強く天神信仰が生きつづけているのも、けつして故なしとしない。日本人の考えも、時代により世相によって多少変わってきたが、根本においては、大義に殉じ非業の最期を遂げた悲劇の英雄に同情し、とりわけ純忠至誠の偉人を敬仰してやまない、という性向が強いように思われる。その意味からも、道真は日本の思想史上に欠くことのできない、もつとも重要な人物の一人だといえよう。

最後に、小説家の曾野綾子さんの言葉（文部省内の研修会で拝聴した講演記録）をご紹介します、結びとしたい。

私は小説家であるから、小さなことしか説かないが、いったい人間とはなんなのか、人間の真の値打ちとはなんなのか、ということを考えている。そして結局、人間は他の動物が殆んどできないことを一つだけやってのける可能性をもっている。それは何かといえば、このことをやれば自分が不利になるかもしれない、と思われるようなことでも、やらなければならぬと思つたらあえてやりとおす。そういう決断力と実行力をもっているということ、これが他の動物にはない人間特有の値打ちだろうと思う。決断力と実行力、つまり真の勇氣をもっていることが、人間としてのもつとも大切な点ではないか。ところが、日本の教育、とくに戦後の教育は、そういう人間の勇氣を養うという教育をほとんどしてこなかった。この点は、文教関係を担当される皆様に、ぜひ考え直していただきたい。（要旨）

では、その勇氣とは何か、ということを考えてみると、もちろん、荒つぽいだけの勇氣ではない。この点を道真の言動についてみれば、ここで言わねばならない、やらねばならない、ということに気づくと、それによって自分が不利になることも承知の上で、はつきり主張し実行している。それが真に勇氣ある態度の一例かと思われる。その意味で、道真はまさに「純忠至誠」の人であり、同時に勇氣の人だといつてよいであろう。

## 〈付〉菅原道真関係略年表

年号	西暦	年齢	菅原道真の関係事項
承和 十二	(八四五)	1	道真誕生(父是善・母伴氏)。同九年に祖父清公薨(73歳)。
貞観 四	(八六二)	18	大学寮の文章生。同九年、文章得業生。同十二年、方略試に及第。
〃 十三	(八七一)	27	玄蕃助・少内記に任ず。翌年、存問渤海客使を務む。
〃 十六	(八七四)	30	従五位下に叙す。兵部少輔・民部少輔に任ず。
元慶 元	(八七七)	33	式部少輔に文章博士を兼ね。同四年に父是善薨(69歳)。
仁和 二	(八八六)	42	讃岐守に転任。同四年、阿衡に關白紛議のさい藤原基経(51歳)に諫言。
寛平 三	(八九一)	47	藏人頭・式部少輔に任じ左中弁を兼ね。翌年、従四位下、左京大夫を兼ね。
〃 五	(八九三)	49	参議に任じ、式部大輔・左大弁・勘解由使長官・春宮亮を兼ね。
〃 六	(八九四)	50	遣唐大使に任ず。遣唐使の中止を奏請。翌年、従三位、中納言に昇る。
〃 八	(八九六)	52	民部卿を兼ね。長女衍子、宇多天皇(30歳)の女御となる。
〃 九	(八九七)	53	権大納言に右大将・中宮大夫を兼ね。正三位に叙す。宇多天皇(31歳)讓位。
昌泰 二	(八九九)	55	右大臣に昇る。翌年、醍醐天皇(15歳)に菅家三代詩文集を献上。

延喜 元	(九〇一)	57	正二位に叙す。大宰権帥に左遷。長男高視らも配流。
〃 三	(九〇三)	59	紀長谷雄に菅家後集を贈る。2月25日薨。同八年、左大臣藤原時平薨(39歳)。
延長 元	(九二二)		皇太子保明親王薨(21歳)。道真の本官を復し正二位を贈る。
正暦 四	(九九三)		道真に正一位・太政大臣を贈る。

(注) 本章は、昭和五十四年(一九七九)十一月十一日、名古屋の熱田神宮文化殿でおこなわれた文化講座の記録で、同講座講演録第二輯(翌年三月刊)所収。おもな参考資料は、川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』(岩波書店・日本古典文学大系)、坂本太郎『菅原道真』(吉川弘文館・人物叢書)、高取正男『菅原道真』(平凡社・日本を創った人々)、拙著『三善清行』(吉川弘文館・人物叢書)など。

なお、6・7・8の項目に関しては、拙稿「菅原道真の配流(昭和五十年、吉川弘文館刊『菅原道真と太宰府天満宮』所載)に詳述、また9・10に関しては、拙稿「菅原道真伝説」(平成五年、新人物往来社刊『日本神話・伝説総覧』所載)に近年の研究史を略述した。